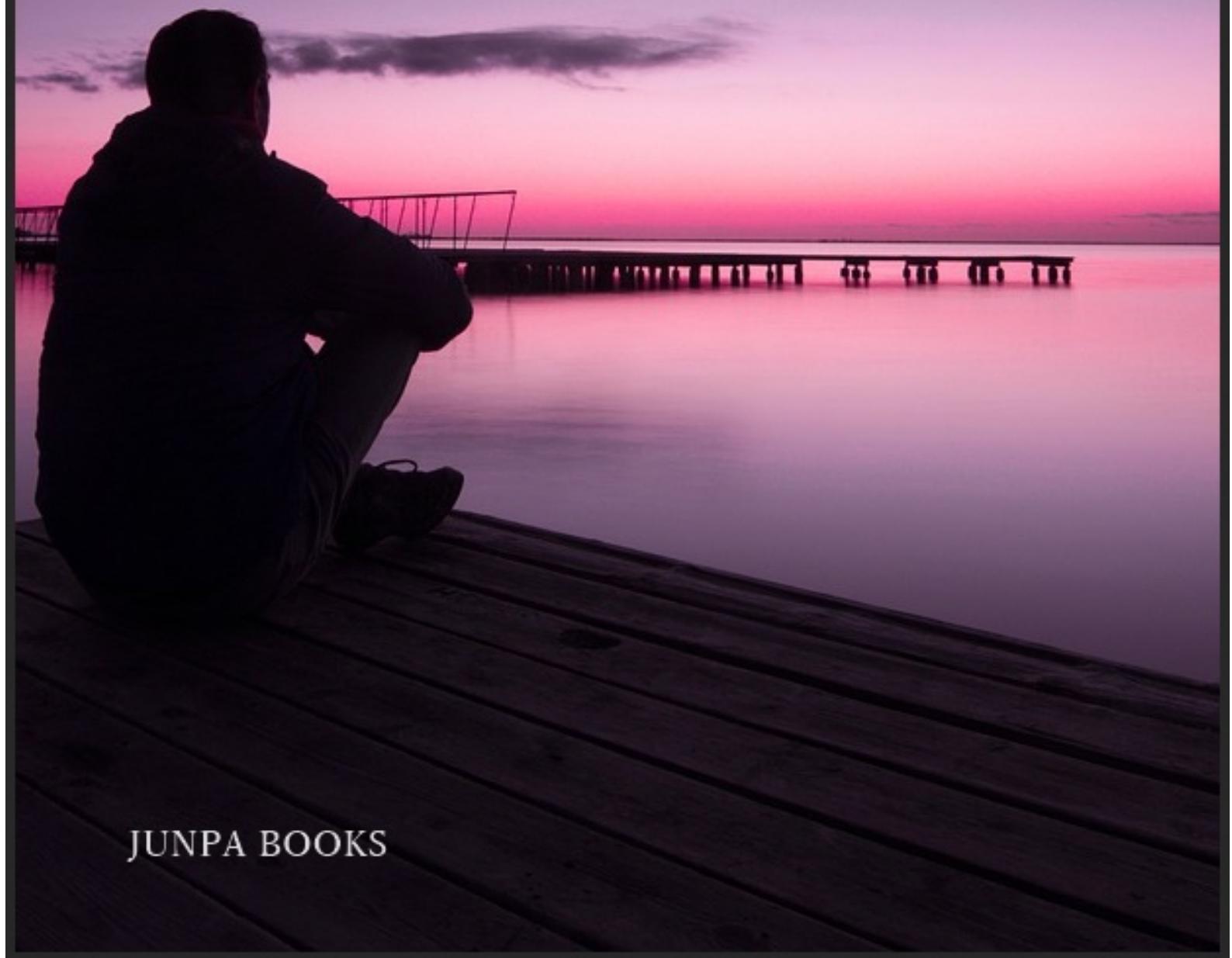


すみくらまりこ 詩集

初恋悲曲



JUNPA BOOKS



すみくらまりこ詩集

初恋悲曲

JUNPA BOOKS

目次 Indice

序文 ダンテ・マッフィア

LA POESIA DI MARIKO SUMIKURA DANTE MAFFIA

初恋悲曲

LA POESIA DI MARIKO SUMIKURA

La poesia di Mariko Sumikura si impone immediatamente nel cuore del lettore perché si presenta leggera come un volo di farfalla, ma subito dispiega la sua natura polivalente, la sua ansia, il suo desiderio di voler decifrare gli assetti e le dinamiche del mondo.

Mariko coglie l' essenza del sentimento e lo condisce con la eleganza di un dettato poetico che non scende mai a patti con la pesantezza della realtà quotidiana per restare comunque sogno, cioè l' altra faccia del vivere, del progettare.

E' come se la poetessa avesse registrato i brividi che il pensiero le suggerisce e ha fatto mazzi di fiori che tuttavia non fanno perno soltanto sul fattore estetico, ma anche etico, impegnato. Tanto è vero che nel mentre ricama le immagini appare sempre una ragione che va oltre per focalizzare una condizione umana, per evitare di affidarsi soltanto a una folata di vento.

Io ho sempre sostenuto e sostengo che la poesia esiste solo e soltanto quando leggendo una pagina noi riusciamo a sentire il caldo dell' anima, la commozione del cuore, l' essenza dell' essere. Altrimenti resta buona o addirittura ottima letteratura ma non poesia.

Ho fatto molte polemiche in proposito dimostrando che alcuni poeti

osannati e portati sugli altari non meritano l’ alloro per essere riusciti a creare mondi e palpiti eterni, ma sono stati interpreti di una materia che hanno affinato fino a far credere di essere arrivati a saper cogliere la brezza gentile e dorata che dà vita, fiato alla parola.

La poesia è altro!

La poesia, come diceva un grande pittore (badate, pittore), Enotrio, sembra che sia fatta di niente, perché è un sospirare che corre e insegue la bellezza e le ragioni intime dell’ amore. Non è costruzione a freddo, impalcatura perfetta e saggia delle “belle lettere” .

Ecco, nella poesia di Mariko si sente immediato il fiato caldo e germogliante della parola. Ella non manipola le espressioni, non le rende disegno imprendibile, anzi abbraccia il lettore e lo coinvolge e insieme poi viene compiuta la visita al mistero, all’ abbaglio che lascia briciole di incanto e nuovi enigmi.

L’ altro grande pregio della poesia di Mariko Sumikura è l’ aver saputo uscire dal peso della grande e meravigliosa tradizione nipponica senza tradirla, anzi portandosi pienamente il meglio e rinverdendolo con innesti di rara delicatezza, con affondi lirici che addirittura riallacciano al Mito e da questo poi dipanano momenti di verità profonde.

Ovviamente non si arriva a tanta raffinatezza se non si passa attraverso una serie di esperienze che si devono vivere integralmente per poter giungere ai

traguardi espressivi che abbiamo davanti.

Insomma, Mariko Sumikura è una poetessa che scrive attingendo alla vita quotidiana, ai libri e ai sogni e il risultato è questa ricchezza di momenti che ci fanno entrare nel divenire, che ci spalancano l'incanto nel suo farsi e disfarsi, nel suo cammino irraggiungibile e abbagliante.

Dante Maffia

すみくらまりこの詩

すみくらまりこの詩は、蝶の飛翔のように軽やかに見えるため、即座に読者的心に押しつけられるが、その多目的な性質、不安、世界の構造と力学を解読したいという願望がすぐに明らかになる。

まりこは感情の本質を捉え、それを詩的な口述の優雅さで味付けしているが、夢、つまり生活の裏側、計画を続けるために、日常の現実の重さと折り合いをつけることは決してない。

それはあたかも詩人がその考えが彼女に示唆する震えを感じて花束を作ったかのようだが、それは美的要素だけでなく、倫理的で献身的な要素にも左右される。そのため、彼女がイメージを刺繡する際には、人間の状態に焦点を当てる超えて、突風だけに頼ることを避ける理由が常に現れる。

私は常に、詩は存在し、ページを読むときにのみ、魂の温かさ、心の感情、存在の本質を感じることができると主張してきた。 そうでなければ、それは優れた、または優れた文学であり続けますが、詩はそうではない。

私はこの点で多くの論争を巻き起こし、賞賛され祭壇に供えられた一部の詩人は永遠の世界と鼓動を創造することに成功したという栄誉には値しないが、人々に信じさせるまでに磨き上げた素材の解釈者であったことを証明した。彼らは、言葉に生命と息吹を与える、

穏やかな黄金の風をなんとか掴んでいたのだ。

詩は別のものだ！

偉大な画家（画家よ、注目してくれ）であるエノトリオは、詩は何からでもできているように見える、なぜならそれは美と愛の親密な理由を追い求めて走るため息だから、と言った。それは冷たい構築ではなく、「美しい文字」の完璧で賢明な足場だ。

ここで、まりこの詩には、言葉の温かく芽生えた息吹がすぐに感じられる。彼女は表現を操作せず、捉えどころのないデザインにせず、逆に読者を抱きしめて巻き込み、謎への訪問、魅惑のかけらと新たな謎を残す妄想への訪問を一緒に実行する。

すみくらまりこの詩のもう一つの大きな利点は、偉大で素晴らしい日本の伝統を裏切ることなく、その重みから逃れることができたことであり、逆に、最高の部分を最大限に引き出し、稀有な繊細さを加えて抒情的な推進力を加えて復活させたことである。それは神話にもつながり、そこから深遠な真実の瞬間が解き明かされる。

明らかに、私たちが目の前にある表現上の目標を達成するために、徹底的に生きなければならない一連の経験を経なければ、そのような洗練を達成することはできない。

端的に言えば、すみくらまりこは日常生活、本、夢を題材にした詩を書く詩人であり、その結果として私たちが成り立つことを可能にするこの豊富な瞬間が生まれ、それが成り立つことと元に戻ること、

その到達不可能な道、そしてその魅力を解き放つ。ただ眩しい。

ダンテ・マッフィア

楽しいさすらい人

お金も車もない
節約デートで
市内の寺社
ほとんど
制覇し

終い天神後
モニカでパフェ
レモンスカッシュ
その年を越した

遠出
滋賀県
長命寺や
三重県では
赤目四十八滝

大阪は梅田
神戸元町

成田山

不動

尊

神仏に

護られて

誰も不快に

させずにきた

二人だった

はしゃぎ

過ぎた

かも

笑

聖夜の贈物

蟹座

獅子座

一人っ子

二十歳同士

仲良し恋人の

比叡山延暦寺で

彼がくれた贈物は

LPレコードだった

レオニード・コーガン

とても重厚なピアニスト

チェリストで指揮もする

音楽好きで独文学生らしい品

わたしは小さな純金の鈴だった

今はなにもかも失ってしまい

忘れ得ぬ事も人も消えて...

こう書き残すとしばらく

思い出に血がめぐって

顔や姿が朧に浮かぶ

お互いに会っても

もう分からぬ
寂しさだけが
確かな事実
そして
心に鈴
鳴る

il regalo che mi ha fatto
Era un disco LP.
Leonid Kogan
E' un pianista molto serio.
Era un violoncellista e direttore d'orchestra.
Era un oggetto adatto a un musicista e studente
laureando in letteratura tedesca.
Quello che gli ho regalato era una campanella d'oro
puro.
Ho già perso tutto
Le persone e le cose che non possono essere
dimenticate scompaiono.
Se lo scrivo per un po'

Il mio sangue scorre attraverso i miei ricordi
Mi vengono in mente il suo viso e la sua figura.
Anche se ci incontriamo
Non lo saprai più.
Solo solitudine
È un dato certo.
Poi
Una campana suona nel mio cuore
squillo

初恋悲曲 壱

もう
どこを探しても
あの時の二人はいない

もし
すれ違ったとしても
あの時の二人ではない

ほんの
ささやかな幸せを
分かち合っただけで

じつに
重い悲しみを
背負うこととなつた

さやさや
笛が鳴つていた

実相院門跡で

そっと
御仏が二人の魂を
抱きとり給うた夜

もう
二人の影が
歩くこともなく—

ほら
いまでも 鈴虫が
悲しい曲を歌っている

初恋悲曲 弐

ただ
路上で影法師が
遊んでいた

ときに
地図の上で
隠れん坊をしていた

でも
影踏みは
決してしなかった

そう
悲しい曲を
離れて奏でていた

いつも
このピアノが歌い

そのチエロが泣いた

あの
六十分の楽曲を
名づけたらどうだろう

ただ
その奏者だけが
聴ける楽音

ほら
目を閉じて
旋律に身を任せよう

初恋悲曲 参

もう
葬った恋は
二度と甦らない

でも
歌の一節が
いつも胸に響いている

まるで
母の子守唄のように
わたしを眠らせる

だれも
哀れんでくれない
下手な初恋だった

そう
無言歌の「舟歌」が

ピアノの最後の声だった

もし

この歌がなければ
何があったというのか

そして

あなたはわたしに
何を残してくれたのか

ああ

何も分け合わず
そっと離れた二人だった

初恋悲曲 四

あの
偶然の再会に
驚いたわけでもはなく

わざと
明るく振舞ったのは
不自然だったかもしれない

でも
樹の幹を叩くように
問い合わせてみたわたし

いつか
会えると思っていた
その言葉を聞いたとき

なぜか
わたしは心のなかで

本当の別れを告げた

すでに
新しい愛の樹が
育っていなければ

もし
孤独の砂漠を
彷徨っていたならば

きっと
想いがあふれて
何も言えなかっただろう

初恋悲曲 五

あの
偶然の再会は
やはり幻だったのだ

だれも
そこにはいなかつた
なんのよすがもない

よし
だれかいたとしても
心を求め合うひとでなく

じっと
わたしの目を見て
心を碎くひとでなく

いつも
わたしを気遣い

庇護する人ではなかった

ああ

ただ悲しいだけの
むらさき色の宝珠が

この

わたしの言葉で
輝きを取り戻せるなら

ただ

絹布（きぬ）で磨いて
大切にしまっておこう

初恋悲曲 六

だれか
押し黙って
耐える少年を見たか

だれか
凍った顔の
虚ろな少女を見たか

でも
どんなことがあっても
生きなければならなかつた

いつか
一途な少女は
沈着冷静な大人になると

きっと
無口な少年は

生真面目な大人になると

だれも
ふたりの明るい
未来を祝福することなく

もし
悲しみを垂れるとすれば
抜け殻のような人の歩み

ああ
無垢な魂を
闇に置き去りにしたこと

初恋悲曲 七

ときに
歳月は優しかった
つねに愛されていた

そして
夢と現を行き交う
人生もわたしらしい

いや
果たせない願望など
捨て去ればよかったです

じつに
互いの約束も
契りもなかつた初恋に

きっと
神様も哀れと

思し召された別離に

そっと

終止符を打てたら

忘れられたものを

でも

誰を恨むことなく

背負って生きた二人

さあ

あの世では話そう

心ゆくまで語りあおう

初恋悲曲 八

まだ
傷は治っていない
この辺が傷みにふれる

もう
クレーの日記を
読むことができない

もう
カンディンスキーの
絵も楽しめない

みな
あの出来事を
思い出させるから

ああ
美しい贈り物は

わたしの胸に守っている

じつに

褶曲（しゅうきょく）した
人生の断層をみれば

きっと

似た曲線をもつ
二つがこの世にあるはず

その

表土を暮しが覆っていく
重みが人を強くしていく

未発表作品